

14
ダビデ
聖徒伝 98

「闇の中で 何を見るか」

サムエル記第二 13～14章

ダビデの深刻な家庭問題

Shikaoichurch.com

アウトライン

0. イントロダクション

I. 息子たちの暴虐と復讐 13章

II. アブサロムの追放と帰還 14章

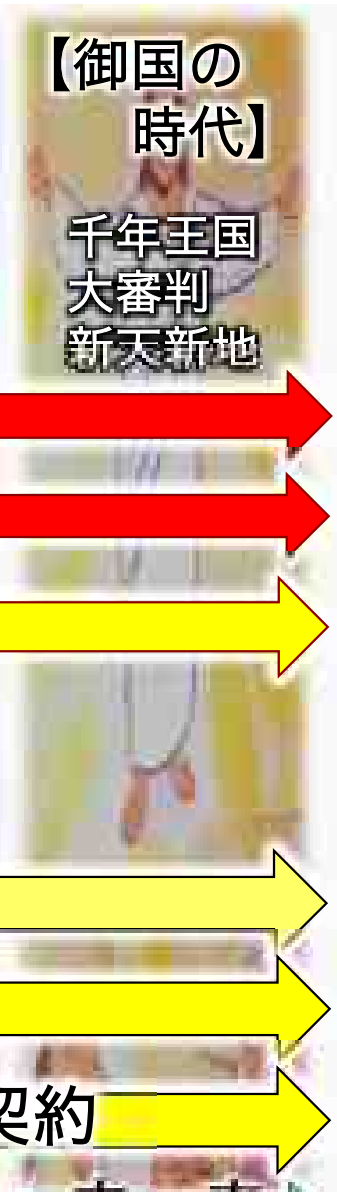
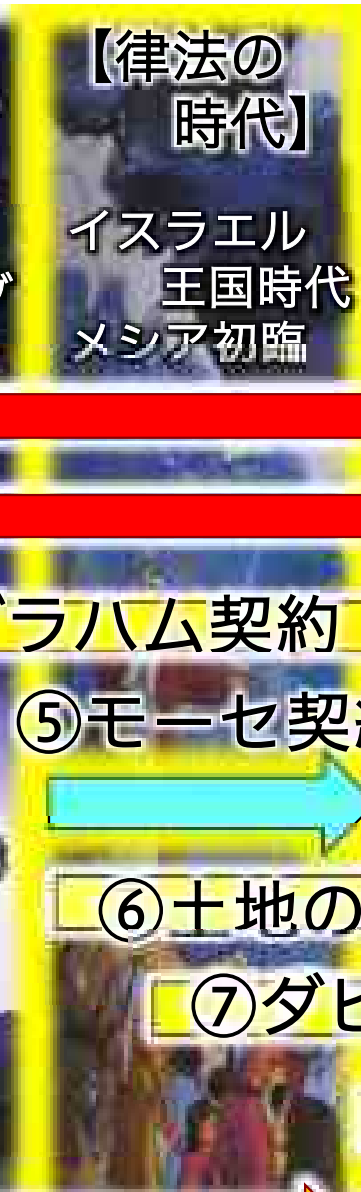
聖書朗読：詩篇12篇

III. まとめと適用

ダビデに学ぶ刈り取りの重さ



エルサレム旧市街



【無垢の時代】

天地創造

【良心の時代】

墮罪
~大洪水

【人類統治の時代】

バベルの塔事件

【約束の時代】

アブラハム
~ヤコブ

【律法の時代】

イスラエル
王国時代
メシア初臨

【恵みの時代】

聖霊降臨
世界宣教
メシア再臨

【御国の時代】

千年王国
大審判
新天新地

①エデン契約

②アダム契約

③ノア契約

④アブラハム契約

⑤モーセ契約

⑥土地の契約

⑦ダビデ契約

⑧新しい契約

過去

現在

未来

どの時代も
神の約束が礎にある

★イスラエルの歩み★

異邦人の時

【千年王国】

メシア再臨

【大患難時代】

エルサレム陥落 70

メシア初臨

【中間時代】

帰還・再建 前538

バビロン捕囚 前587

新しい契約

北イスラエル滅亡 前722

南北分裂 前950

ダビデ契約

【王国時代】

土地の契約

【カナン定着・士師時代】

モーセ契約

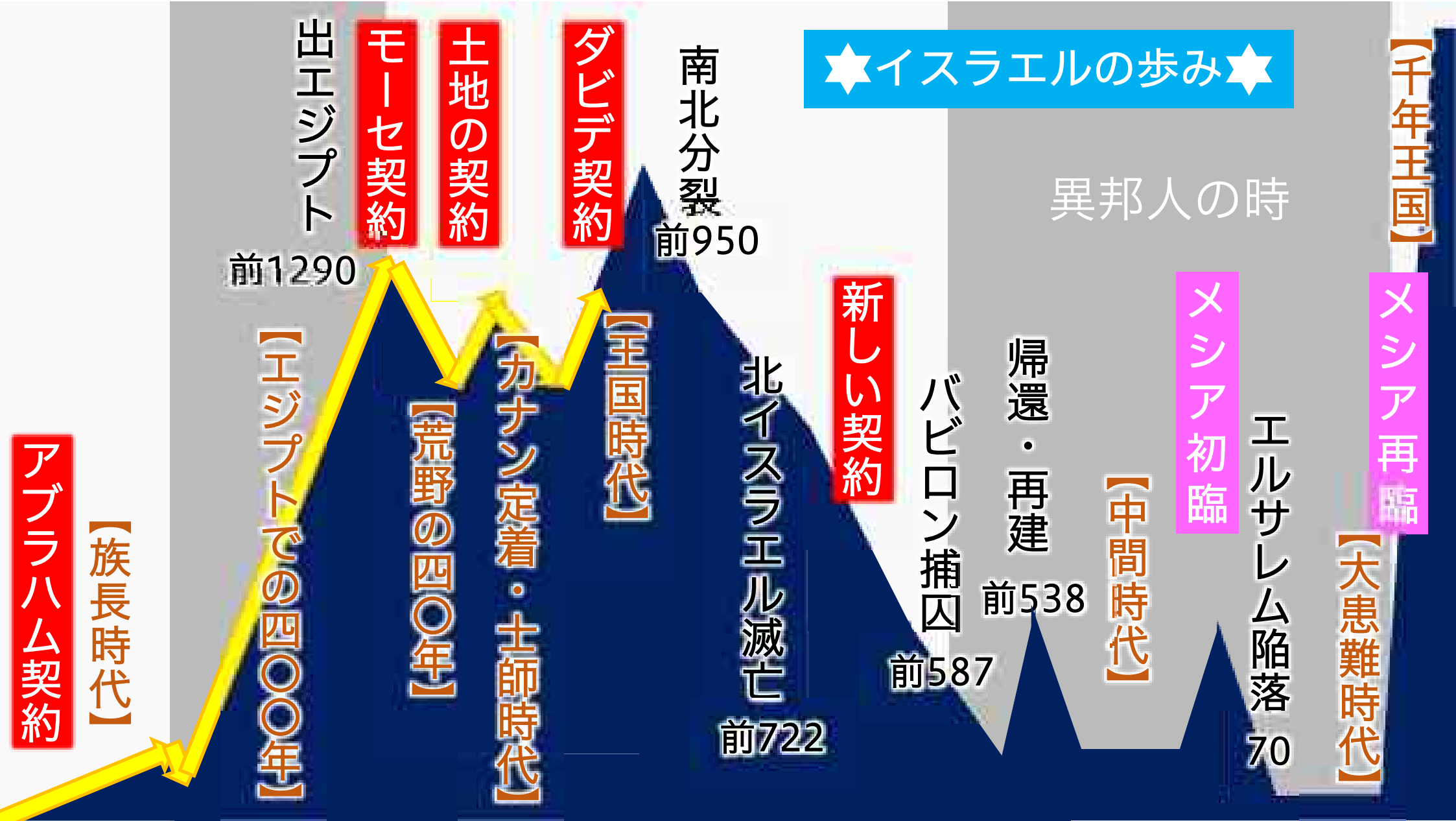
【荒野の四〇年】

出エジプト 前1290

【エジプトでの四〇〇年】

【族長時代】

アブラハム契約



【ダビデ契約とは？】

- エブス人を討ち、エルサレムを都としたダビデ王が、契約の箱をエルサレムに運び入れた後、神が**一方に約束***されたこと。
→無条件契約*

- アブラハム契約の「**子孫の約束**」の発展版。

- ユダ族のダビデ王の家系から**メシア**が誕生することが明らかになった。

ダビデの系譜を主は何があっても守られる



サムエル記 第二

ダビデ王の治世の正と負

ユダの王	1 : 1~27	サウルとヨナタンの死
	2 : 1~4:12	ユダの王に即位
イスラエルの王	5:1~25	エルサレム遷都 全イスラエルの王に
	6:1~25	神の箱が都に上る
	7:1~29	ダビデ契約 の締結
	8:1~9:11	ダビデの治世 領土の拡大・義と憐れみ
失墜する 王の権威	10:1~12:31	アンモンとの戦い ダビデの過ちと悔い改め
	13:1~14:33	悪化する家族問題
	15:1~18:32	アブサロムの謀反 ダビデの都落ち
	19:1~20:26	ダビデの帰還
追記	21:1~22	サウルの氏族の末路・戦士ダビデの引退
	22:1~51	ダビデの歌
	23:1~39	ダビデの遺言 勇士たちの記録
	24:1~25	人口調査 ダビデの罪と罰

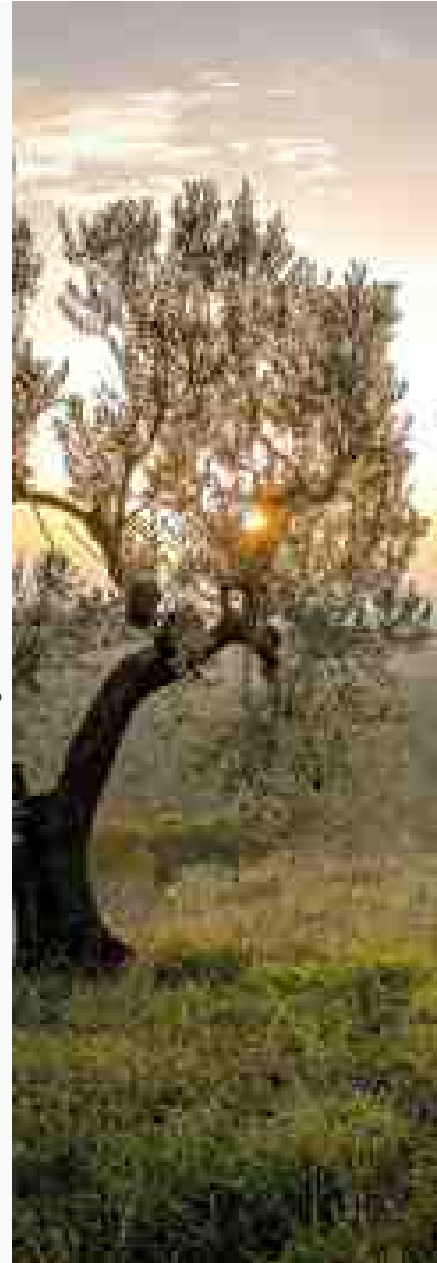
【ダビデの足取り】

■ ダビデは、イスラエルの王となり、エルサレムの都に神の箱を担ぎ上げた。

■ 神は、ダビデの王家を永遠に守り導くと約束された。

■ 周辺諸国の平定を間近にしたある時、ダビデは、バテ・シェバと姦淫を犯し、夫ウリヤを戦死に見せかけ殺害。

■ ナタンの叱責を受けて悔い改め、罪ゆるされたダビデ。しかし、厳しい罪の刈り取りが待っていた。



ガラテヤ人への手紙6:7~8

6:7 思い違いをしてはいけません。

神は侮られるような方ではありません。

人は種を蒔けば、刈り取りもすることになります。

6:8 自分の肉に蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、

御霊に蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。



Ⅰ. 息子たちの暴虐と復讐

サムエルⅡ 13章

エルサレム旧市街

【アムノンとタマル】 Ⅱ サムエル13:1～2

その後のことである。ダビデの子**アブサロム***に、**タマル***という名の美しい妹がいた。ダビデの子**アムノン***は彼女に恋をした。

アムノンは、妹**タマル**のゆえに苦しんで、病気になるほどであった。というのは、彼女が処女であって、アムノンには、彼女に何かをするということはとてもできないと思われたからである。

*“私の父は平和” …ダビデの三男

*“なつめやし” …アブサロムの実妹

*“忠実、誠実、貞節” …ダビデの長男



近親相姦は律法が禁止

【ダビデの息子たち】



ダビデ王

三男

長男

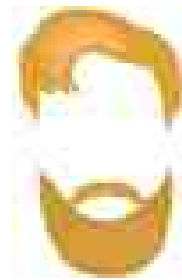


ソロモン

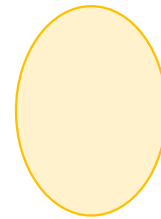
...



アドニヤ



アブサロム



キルアブ



アムノン



タマル

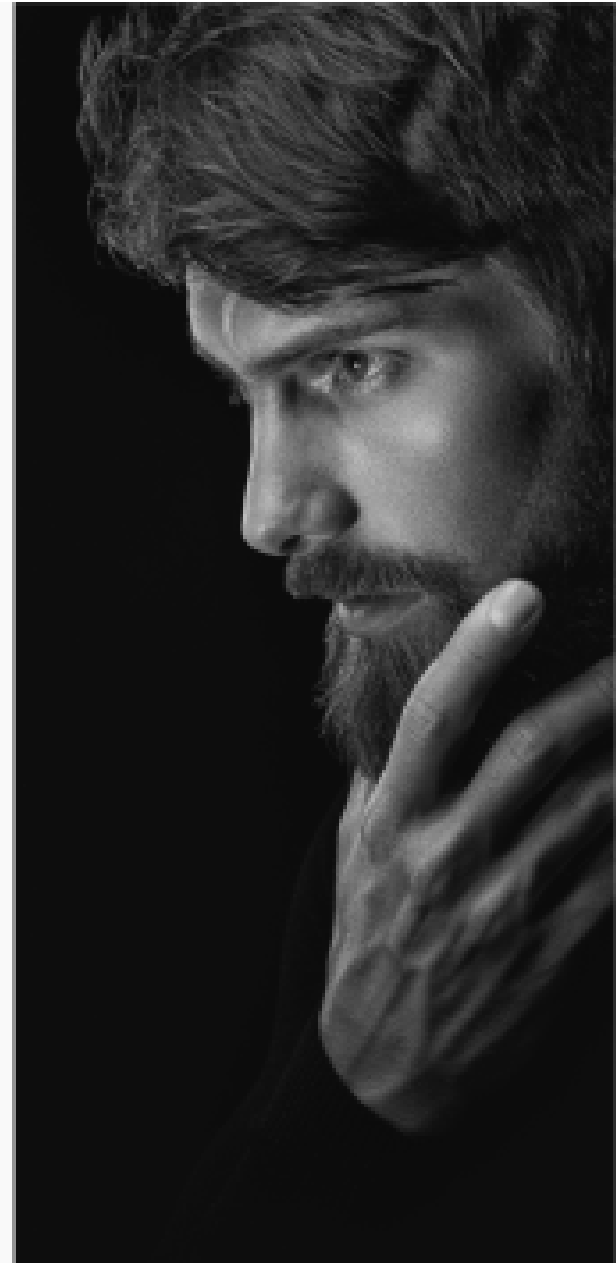
皆、母親は違う!!

【ヨナダブの知恵】 II サムエル13:3

アムノンには、ダビデの兄弟シムアの息子で**ヨナダブ**という名の友人がいた。**ヨナダブ**は非常に**知恵のある**男であった。

彼は**アムノン**に言った。「王子様。なぜ、朝ごとにやつれていかれるのですか、そのわけを話してください。」**アムノン**は**彼**に言った。「私は、兄弟アブサロムの妹タマルを愛している。」

ヨナダブは**彼**に言った。「床に伏せて、病気のふりをなさってください。父君が見舞いに来られたら、こう言うのです。『どうか、妹のタマルをよこして、私に食事をとらせるようにしてください。彼女が私の目の前で食事を作って、私はそれを見守り、彼女の手から食べたいのです。』」



【人物相関図】

ダビデ王



部下



将軍ヨアブ

甥



ヨナダブ

次子



アブサロム

長子



アムノン

異母兄弟



従兄弟

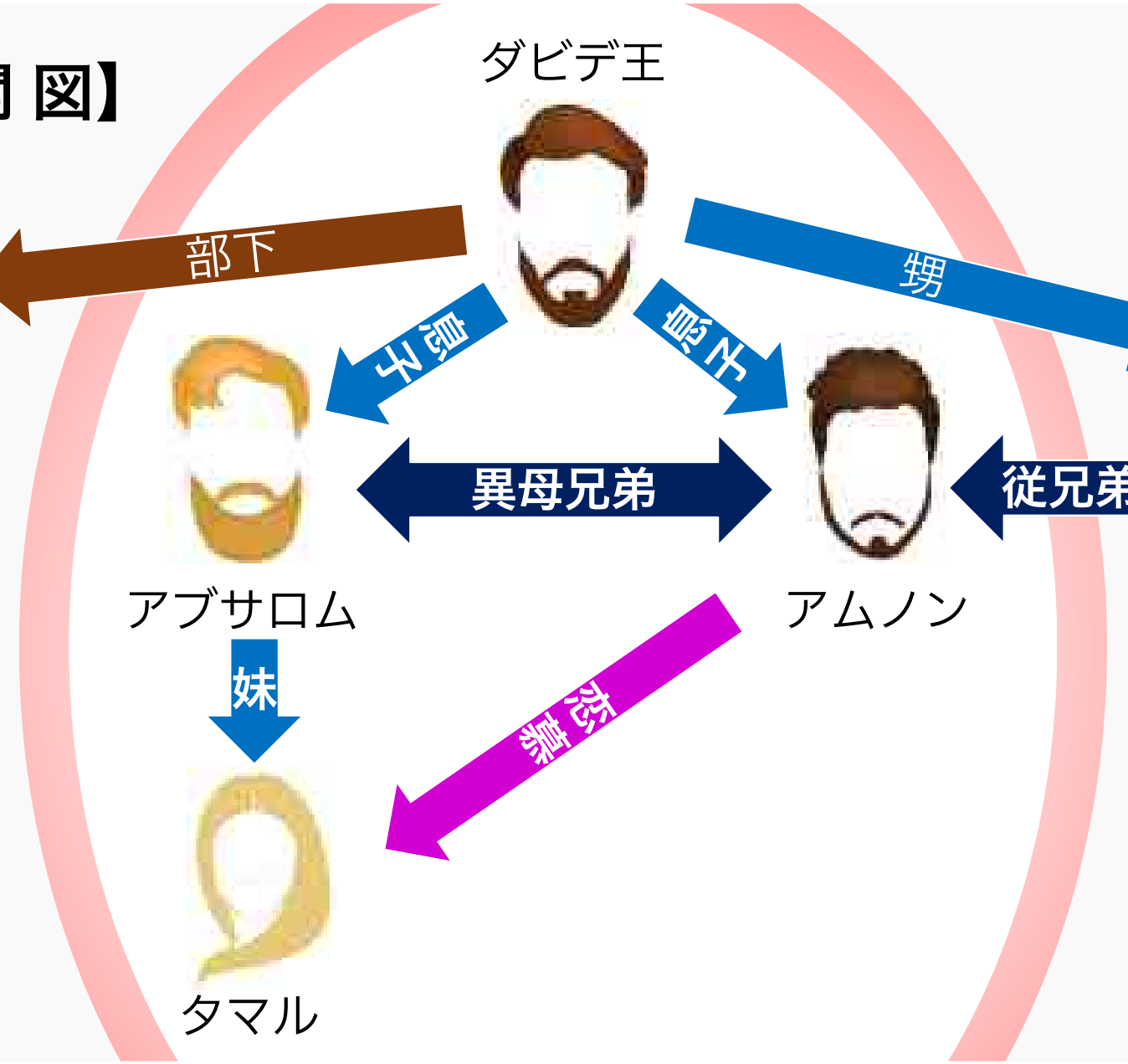
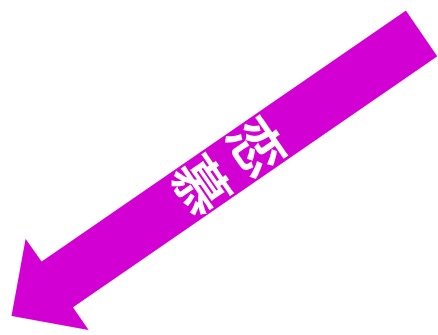


妹



タマル

姪



【アムノンの仮病】 II サムエル13:6～8

アムノンは床につき、仮病を使った。王が見舞いに来ると、アムノンは王に言った。「どうか、妹のタマルをよこし、目の前で団子を二つ作らせてください。私は彼女の手から食べたいのです。」

ダビデは、タマルの家に人を遣わして言った。「兄さんのアムノンの家に行って、病人食を作ってください。」

タマルが兄アムノンの家に行ったところ、彼は床についていた。彼女は生地を取ってそれをこね、彼の目の前で団子を作ってそれをゆでた。



【アムノンの謀略】 II サムエル13:9~11

彼女は鍋を取り、それを彼の前によそったが、彼は食べることを拒んだ。アムノンが「皆の者をここから出て行かせよ」と言ったので、みなアムノンのところから出て行った。

アムノンはタマルに言った。「食事を寝室に持って来ておくれ。私はおまえの手からそれを食べたい。」タマルは、自分が作ったゆでた団子を兄のアムノンの寝室に持って来た。

彼女が食べさせようとして、彼に近づくと、彼は彼女を捕まえて言った。「妹よ、おいで。私と寝よう。」



【アムノンの罪】 II サムエル13:12~14

彼女は言った。「いけません。兄上。乱暴してはいけません。イスラエルでは、こんなことはしません。こんな愚かなことをしないでください。

私は、この汚名をどこに持って行けるでしょうか。あなたも、イスラエルで愚か者のようになるのです。今、王に話してください。きっと、王は私があなたに会うのを拒まないでしょう。」

しかし、アムノンは彼女の言うことを聞こうともせず、力づくで彼女を辱めて、彼女と寝た。



【愛憎】 II サムエル13:15～17

アムノンは、激しい憎しみにかられて、彼女を嫌った。その憎しみは、彼が抱いた恋よりも大きかった。アムノンは彼女に言った。「起きて、出て行け。」

タマルは言った。「それはなりません。私を追い出すなど、あなたが私にしたあのことより、なおいっそう悪いことですから。」しかし、アムノンは彼女の言うことを聞こうともせず、

召使いの若い者を呼んで言った。「この女をここから外に追い出して、戸を閉めてくれ。」

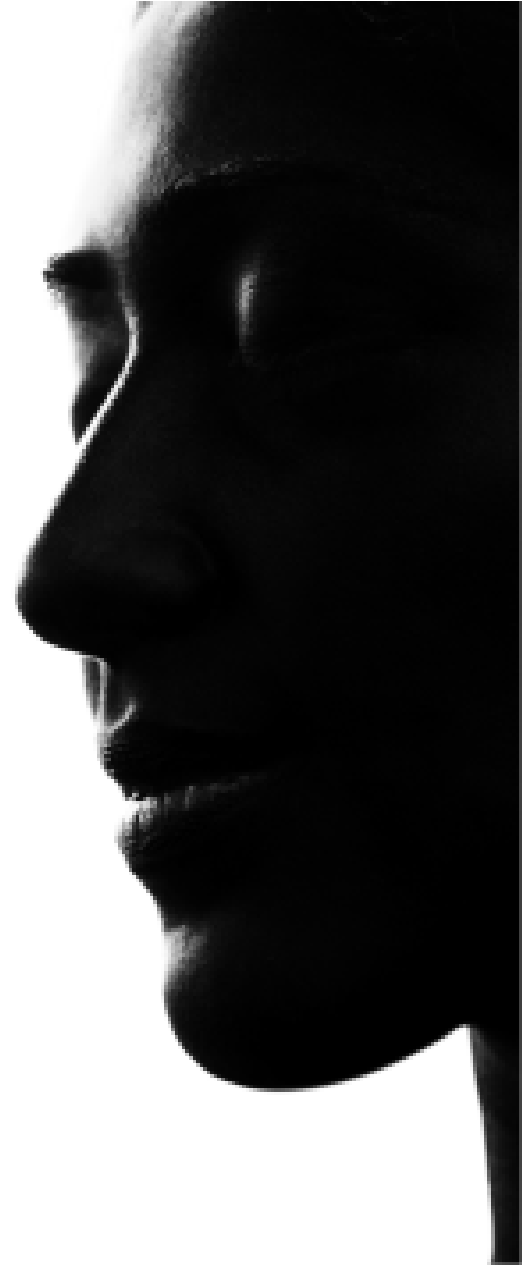


【タマルの嘆き】 II サムエル13:18~20

彼女は、あや織りの長服を着ていた。昔、処女である王女たちはそのような身なりをしていたのである。召使いは彼女を外に追い出し、こうして戸を閉めてしまった。タマルは頭に灰をかぶり、身に着けていたあや織りの長服を引き裂き、手を頭に置いて、泣き叫びながら歩いて行った。

彼女の兄アブサロムは彼女に言った。「おまえの兄アムノンが、おまえと一緒にいたのか。妹よ、今は黙っていなさい。彼はおまえの兄なのだ*。このことで心配しなくてもよい。」タマルは、兄アブサロムの家で、一人わびしく暮らしていた。

*アブサロムは、元々、兄が疎ましかった？



【怒りと憎悪】 II サムエル13:21～22

ダビデ王は、事の一部始終を聞いて激しく怒った*。

アブサロムはアムノンに、このことが良いとも悪いとも何も言わなかった。アブサロムは、アムノンが妹タマルを辱めたことで、彼を憎んでいたから*である。

*怒ったダビデだが、アムノンへの処罰は？

→自分自身の犯した、かつての罪が妨げに？

→対処の甘さが、暴虐の口実を与えることに!!

*アムノンへの憎しみを募らせていったアブサロム

→長兄アムノンを討つ機会を狙い続けていた。



【羊の刈り取りの祝い】 II サムエル13:23～24

満二年たって、アブサロムがエフライムの近くのバアル・ハツォル*で羊の毛の刈り取りの祝い*をしたとき、アブサロムは王の息子たち全員を招いた。

アブサロムは王のもとに行き、こう言った。

「ご覧ください。このしもべは羊の毛の刈り取りの祝いをすることにしました。どうか、王も家来たちも、このしもべと一緒においでください。」

*イスラエル北側の近郊だろう。

*羊飼いにとっての収穫祭。3～4月頃。



【アブサロムの勧めに】 II サムエル13:25~27

王はアブサロムに言った。「いや、わが子よ。われわれ全員が行くのは良くない。あなたの重荷になってもいけないから。」アブサロムは、しきりに勧めたが、ダビデは行きたがらず、ただ彼に祝福を与えた。

アブサロムは言った。「それなら、どうか、私の兄アムノンを私どもと一緒に行かせてください。」王は彼に言った。「なぜ、彼があなたと一緒に行かなければならないのか。」

アブサロムがしきりに勧めたので、王はアムノンと王の息子たち全員を彼と一緒に行かせた。



王の代行に、
長子の出席は
理に適う求め

【アブサロムの命令】 II サムエル13:28～29

アブサロムは、自分に仕える若い者たちに命じて言った。「よく注意して、アムノンが酔って上機嫌になったとき、私が『アムノンを討て』と言ったら、彼を殺せ。恐れてはならない。この私が命じるのではないか。強くあれ。力ある者となれ*。」

アブサロムの若い者たちは、アブサロムが命じたとおりにアムノンにした。王の息子たちはみな立ち上がって、それぞれ自分のらばに乗って逃げた。

*動機はひたすら、個人的憎悪。

➡周到な準備を重ねた上での計画的犯行。



【悲報】 II サムエル13:30~31

彼らがまだ道の途中にいたとき、ダビデのところに、「アブサロムは王のご子息たちを全員殺しました。残された方は一人もいらっしゃいません」という知らせが届いた。

王は立ち上がり、衣を引き裂き、地に伏した。傍らに立っていた家来たちもみな、衣を引き裂いた。

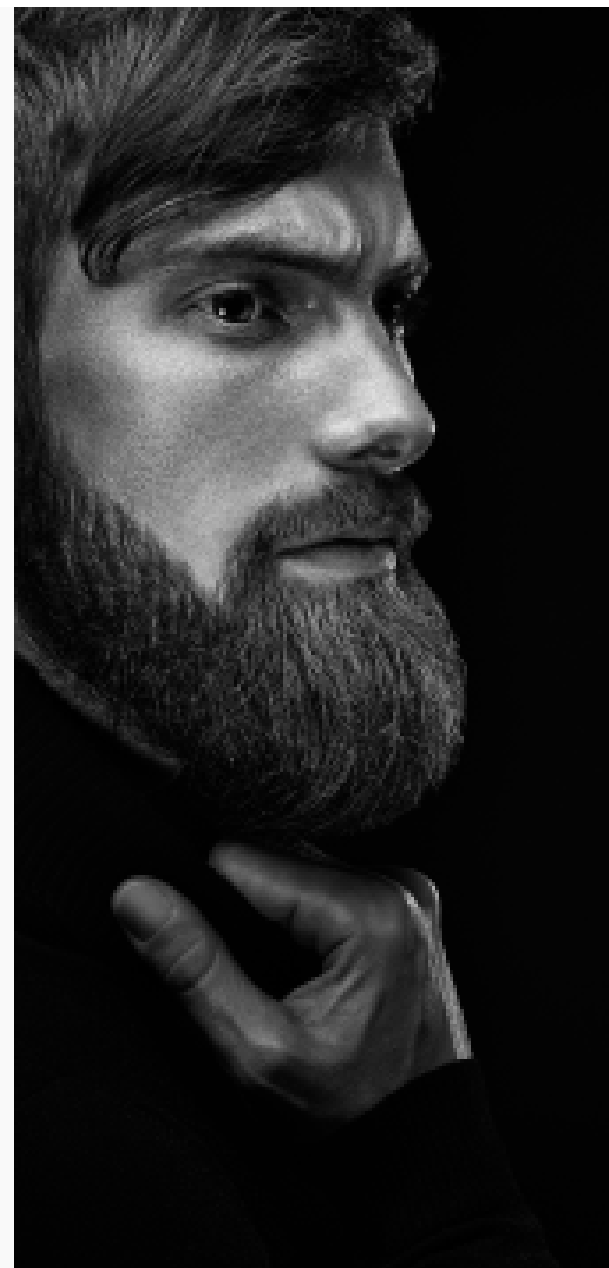


【ヨナダブの証言】 II サムエル13:32～33

ダビデの兄弟シムアの子ヨナダブは、証言をして言った。「王様。彼らが王のご子息である若者たちを全員殺したとお思いになりませんように。アムノンだけが死んだのです。それはアブサロムの命令によるもので、アムノンが妹のタマルを辱めた日から、胸に抱いていたことです。

今、王様。王子たち全員が殺された、という知らせを心に留めないでください。アムノンだけが死んだのです。」

*分かっている、アムノンを引き留めなかった？



【生還した息子たち】 II サムエル13:34～36

アブサロムは逃げた。見張りの若者が目を上げて見ると、見よ、うしろの山沿いの道から大勢の人々がやって来る場所であった。

ヨナダブ*は王に言った。「ご覧ください。王子たちが来られます。このしもべが申し上げたとおりになりました。」

彼が語り終えたとき、見よ、王子たちが来て、声をあげて泣いた。王もその家来たちもみな、非常に激しく泣いた。

*これ以降、一度も登場しない。



【ダビデの嘆き】 II サムエル13:37～39

アブサロムは、ゲシュルの王アミフデの子タルマイのところに逃げた。ダビデは、毎日アムノンの死を嘆き悲しんでいた。

アブサロムは、ゲシュル*に逃げて行き、三年の間そこにいた。

アブサロムのところに向かって出て行きたいという、ダビデ王の願いはなくなった。アムノンが死んだことについて慰めを得たからである。

*母の故郷に逃れたアブサロム





II. アブサロムの追放と帰還

サムエル記 II 14章

エフライム丘陵の段々畑

【人物相関図】

ダビデ王



部下



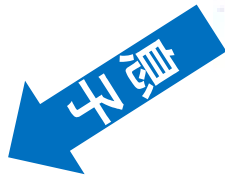
甥



同情



大逆



大逆



殺害



入れ知恵



将軍ヨアブ

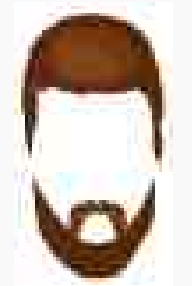
アブサロム



アムノン



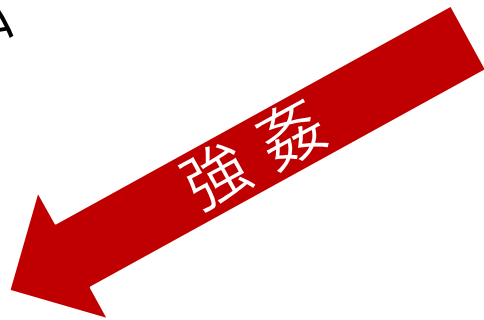
ヨナダブ



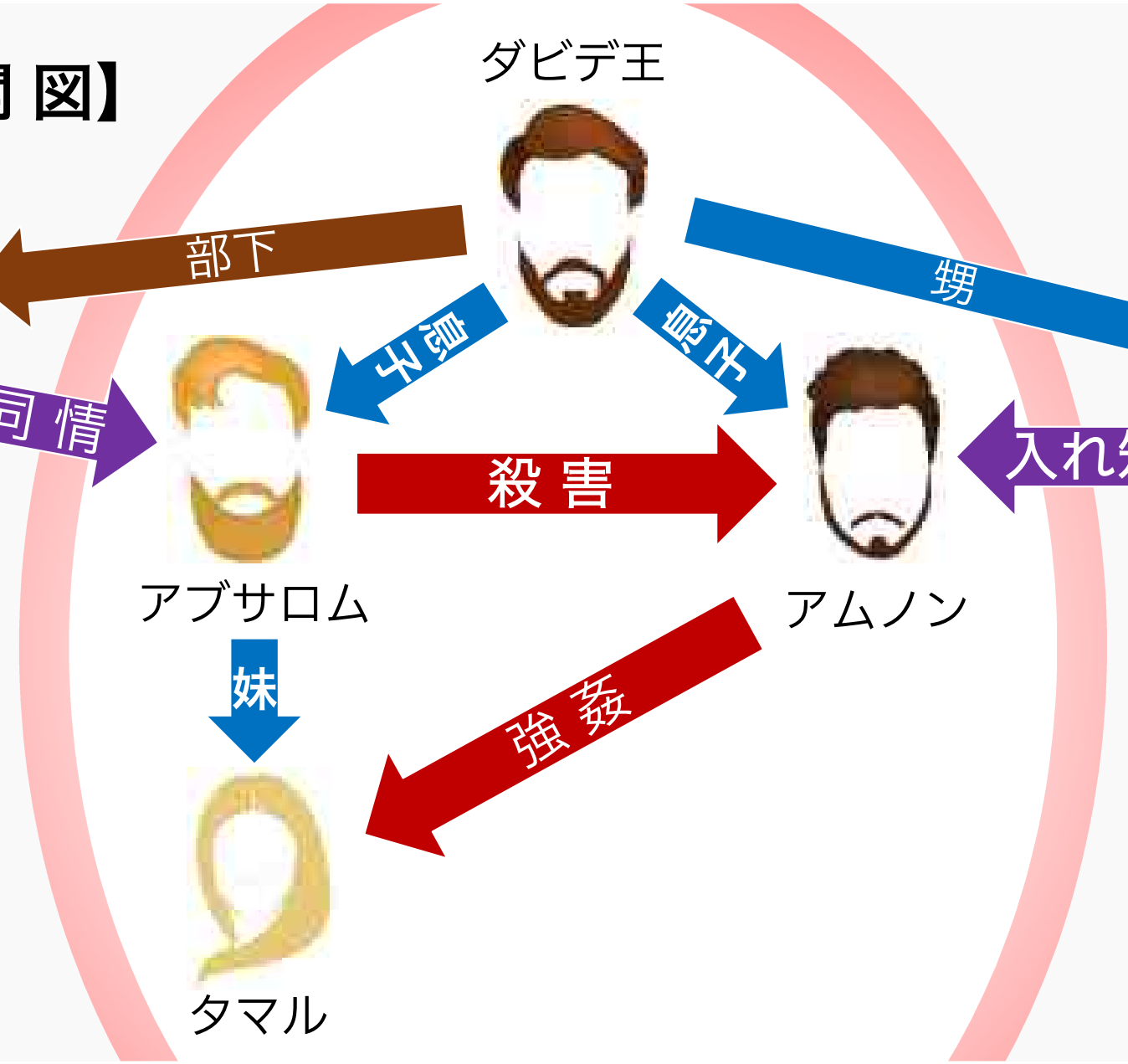
妹



強姦



タマル



【ヨアブの計らい】 II サムエル14:1~3

ツェルヤの子ヨアブは、**王の心がアブサロムに向いている*** ことを知った。

ヨアブはテコアに人を遣わして、そこから知恵のある女を連れて来て、彼女に言った。「喪に服している者を装い、喪服を着て、身に油も塗らず、死んだ人のために長い間喪に服している女のようになって、王のもとに行き、王にこのように話してください。」ヨアブは彼女の口にことばを与えた。

***ダビデのジレンマをよく理解していたヨアブ。**

➡王の意向をくみ取るからこそそのNo 2の座か。



【女の訴え】 II サムエル14:4~6

テコアの女は、王に話したとき、地にひれ伏して礼をして言った。「お救いください。王様。」

王は彼女に言った。「いったい、どうしたのか」
彼女は答えた。「実はこの私はやもめで、夫は亡くなりました。このはしためには二人の息子がおりましたが、二人が野原でけんかをして、**だれも二人を仲裁する者がいなかった***ので、一人が相手を打ち殺してしまいました。」

***ヨアブは、暗にダビデの責任を問うている？**



【女の訴え】 Ⅱ サムエル14:7~9

すると、お聞きください、親族全体がこのはしために詰め寄って、『兄弟を打った者を引き渡せ。彼が殺した兄弟のいのちのために、彼を殺し、この家の世継ぎも消し去ろう』と言います。残された私の一つの火種を消して、夫の名だけではなく、残りの者までも、この地に残さないようにするのです。」

王は女に言った。「家に帰りなさい。あなたのことで命令を出そう。」

テコアの女は王に言った。「王様。刑罰は私と私の父の家に下り、**王様と王位は罰を免れますように**」



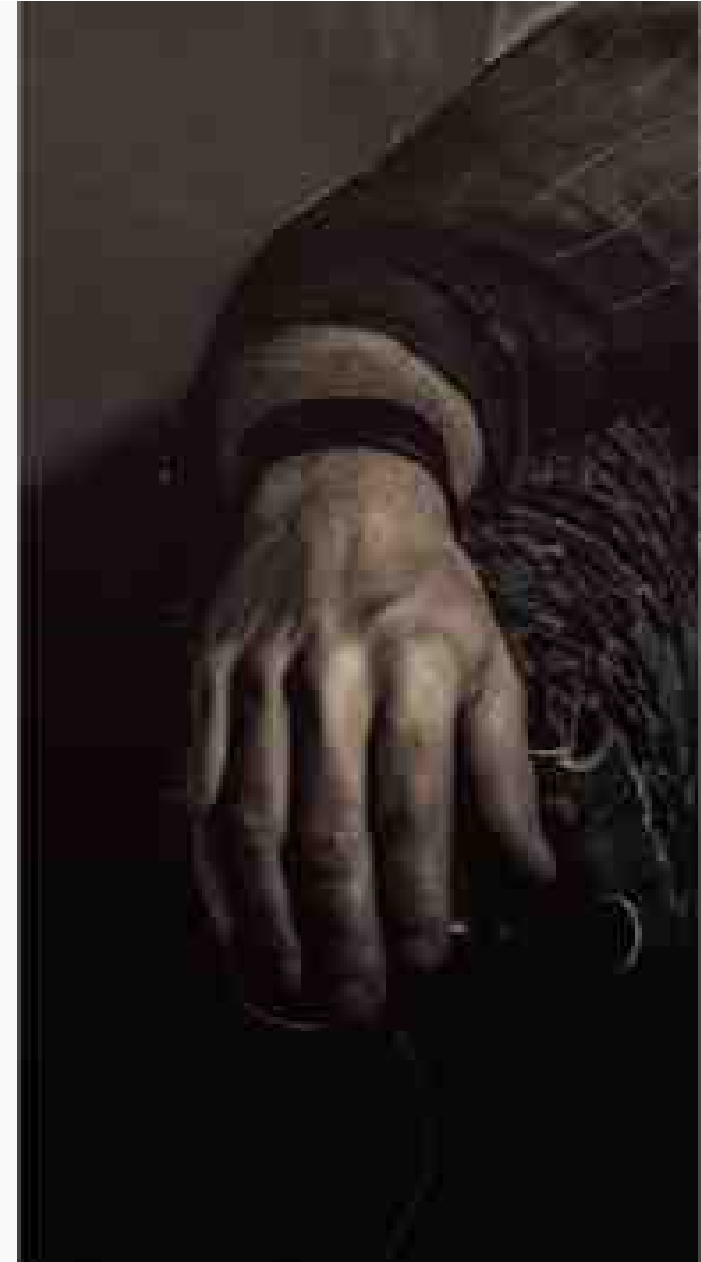
さらっと、
すごいことを…

【ダビデの裁定】 II サムエル14:10~12

王は言った。「あなたに文句を言う者がいるなら、その人を、私のところに連れて来なさい。もう二度とあなたを煩わすことはなくなる。」

彼女は言った。「どうか王様。あなたの神、【主】に心を留め、血の復讐をする者が殺すことを繰り返さず、私の息子を消し去らないようにしてください。」王は言った。「【主】は生きておられる。あなたの息子の髪の毛一本も決して地に落ちることはない。」

女は言った。「このはしたために、一言、王様に申し上げさせてください。」王は言った。「言いなさい。」



【さらなる訴え】 II サムエル14:13~14

女は言った。「あなた様はどうして、神の民に対してこのようなことを計られたのですか。王様は、先のようなことを語って、ご自分を咎ある者としておられます。王様は追放された者を戻しておられません。

私たちは、必ず死ぬ者です。私たちは地面にこぼれて、もう集めることができない水のようなものです。しかし、神はいのちを取り去らず、追放されている者が追放されたままにならないように、ご計画を立ててくださいます。」



【最後の訴え】 II サムエル14:15~17

今、私が、このことを王様に話しに参りましたのも、人々が私を脅したからです。このはしためは、こう思いました。『王に申し上げよう。王は、このはしための願いをかなえてくださるかもしれない。』

王は聞き入れて、私と私の息子を神のゆずりの地から消し去ろうとする者の手から、このはしためをきっと助け出してくださるから。』

このはしためは、『王様のことばは私の慰めとなるに違いない』と思いました。王様は、神の使いのように、善と悪を聞き分けられるからです。あなた様の神、

【主】が、あなたとともにおられますように。」



【ダビデの問いかけ】 Ⅱ サムエル14:18~19

王は女に答えて言った。「私が尋ねることに、隠さずに答えなさい。」女は言った。「王様、どうぞお尋ねください。」

王は言った。「これはすべて、ヨアブの指図によるのであろう。」女は答えて言った。「王様、あなたのたましいは生きておられます。王様が言われることから、だれも右にも左にもそれることはできません。」

■ 靈的感性が鈍っていたダビデとはいえ…。

ヨアブも、あまりにあからさますぎたか?!



【女の告白】 II サムエル14:19～20

「確かに王様の家来ヨアブが私に命じ、あの方がこのはしための口に、これらすべてのことばを授けたのです。

王様の家来ヨアブは、事の成り行きを変えるために、このことをしたのです。あなた様には、神の使いの知恵のような知恵があり、地上のすべてのことをご存じですから。」

■ 王への不敬となれば…。女の必死さが伝わる。



【ダビデの決定】 II サムエル14:21～22

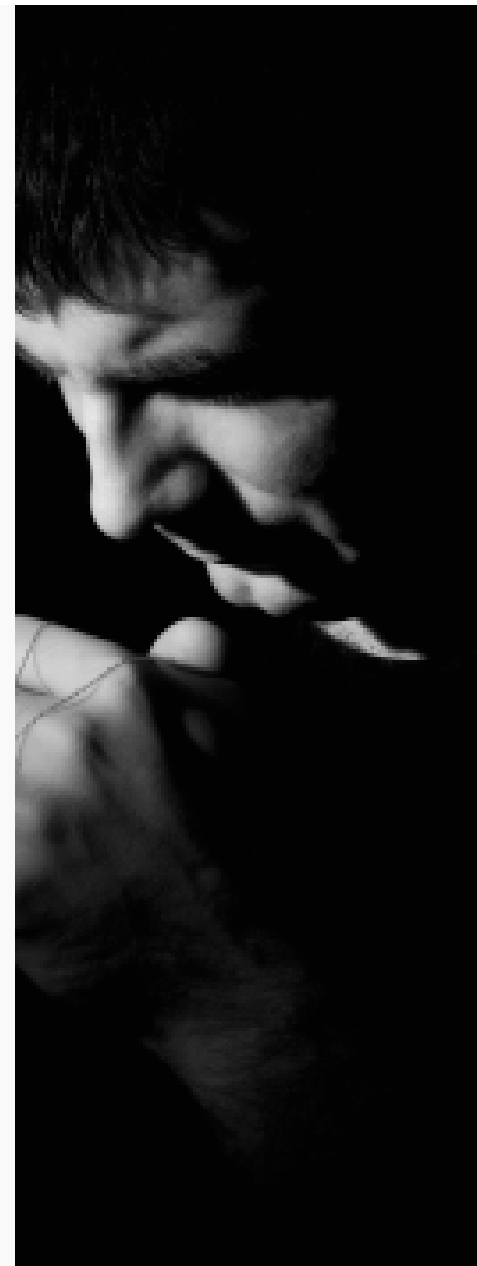
王はヨアブに言った。「よろしい。その願いを聞き入れた。行って、若者アブサロムを連れ戻しなさい。」

ヨアブは地にひれ伏して礼をし、王に祝福のことばを述べて言った。「今日、このしもべがご好意を受けていることが分かりました。王様。王が、このしもべの願いを聞き入れてくださったのですから。」

■ 直接ヨアブに語り、アブサロムの帰還を認めた。

■ ヨアブの願い通りの結果に。

➔ 決断が後手に回り、かすれていくダビデの権威。



【半端な決定】 II サムエル14:23～24

ヨアブはすぐゲシュルに出かけて行き、アブサロムをエルサレムに連れて来た。

王は言った。「あれは自分の家に行ってもらおう。私の顔を見ることはならぬ。」アブサロムは自分の家に行き、王の顔を見ることはなかった。

■ 都に戻ったが、家族扱いはされていない。

➡ ゆるしたはずだが、ゆるしていない。

半端なゆるしは、苦痛を生み出すだけ。



【アブサロム】 II サムエル14:25～26

さて、イスラエルのどこにも、アブサロムほど、その美しさをほめそやされた者はいなかった。足の裏から頭の頂まで、彼には非の打ちどころがなかった。

彼は毎年、年の終わりに、頭が重いので髪の毛を刈っていたが、刈るときに髪の毛を量ると、王の秤で二百シェケル*もあった。

*単位不明瞭。2kg!! アブサロムの誇張?!

■ここで語られる、アブサロムの性質。

→外見の美しさ。隠せない傲慢さ。



【アブサロムの娘】 II サムエル14:27～28

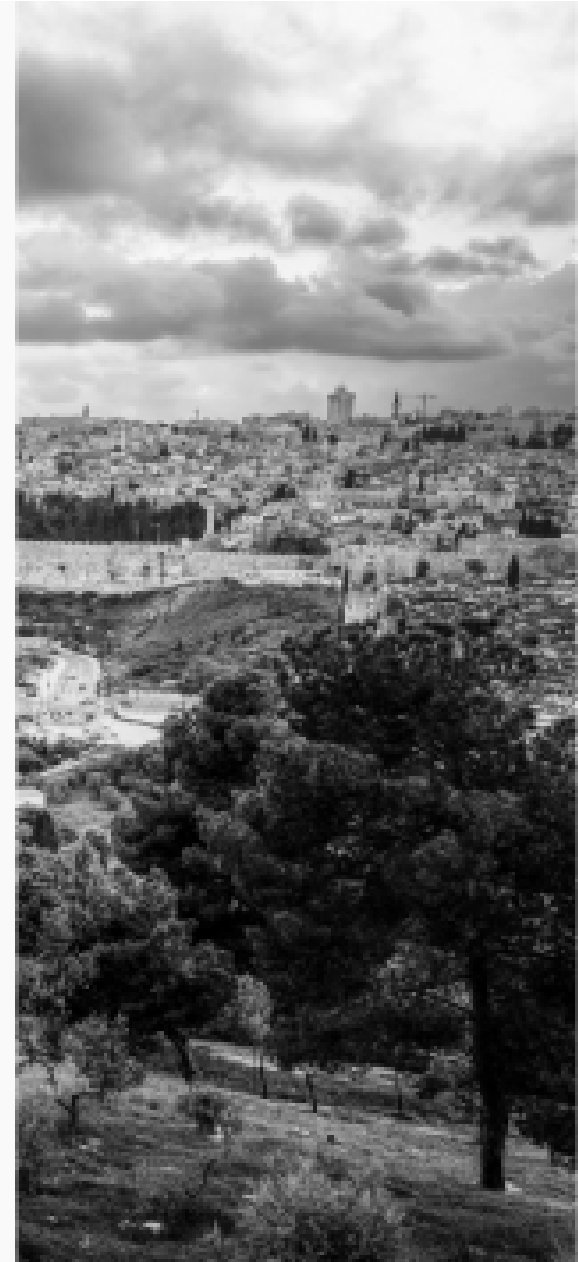
アブサロムに、三人の息子と一人の娘が生まれた。その娘の名はタマル*とって美しい女であった。

アブサロムは二年間エルサレムに住んでいたが、王の顔を見ることはなかった。

*妹タマルと同じ名。

■ 「タマル」は、ユダ族のルーツとなる女性の名。

➔王位継承への強い願望の現われ？



【畑に放たれた火】 II サムエル14:29～30

アブサロムは、ヨアブを王のところに送ろうとして、ヨアブのもとに人を遣わしたが、彼は来ようとしなかった。アブサロムはもう一度、人を遣わしたが、ヨアブは来ようとしなかった。

アブサロムは家来たちに言った。「見よ。ヨアブの畑は私の畑のそばにあり、そこには大麦が植えてある。行って、それに火をつけよ。」アブサロムの家来たちは畑に火をつけた。

■三度目が忍耐できない？ 明らかにやりすぎ。

➡正当化しえないアブサロムの本質の現われ。



【ヨアブの返答】 II サムエル14:31～33

ヨアブは立ち上がり、アブサロムの家に来て、彼に言った。「なぜ、あなたの家来たちは私の畑に火をつけたのですか。」

アブサロムはヨアブに答えた。「ほら、私はあなたのところに人を遣わし、ここに来るように言ったではないか。私はあなたを王のもとに遣わし、『なぜ、私をゲシュルから帰って来させたのですか。あそこにとどまっていたほうが、まだ、ましでした』と言ってもらいたかったのだ。」



【儀式的和解】 II サムエル14:32～33

今、私は王の顔を拝したい。もし私に咎があるなら、王に殺されてもかまわない。」

ヨアブは王のところに行き、王に告げた。王はアブサロムを呼び寄せた。アブサロムは王のところに来て、王の前で地にひれ伏して礼をした。王はアブサロムに口づけした。

■ 力技で王への面会を果たしたアブサロム。

本意でない形で、息子との和解を示したダビデ。

→ 確執が積み重なったまま、次回、大事件へ。





指揮者のために。第八の調べにのせて。ダビデの賛歌。

聖書朗読 詩篇12篇

12:1 【主】よお救いください。

敬虔な人は後を絶ち 誠実な人は
人の子らの中から消え去りました。

12:2 人は互いにむなしいことを話し
へつらいの唇と二心で話します。

12:3 【主】がへつらいの唇と傲慢の舌を
ことごとく断ち切ってくださいますように。



12:4 彼らはこう言っています。

「われらはこの舌で勝つことができる。

この唇はわれらのものだ。

だれがわれらの主人なのか。」

12:5 【主】は言われます。

「苦しむ人が踏みにじられ

貧しい人が嘆くから

今わたしは立ち上がる。

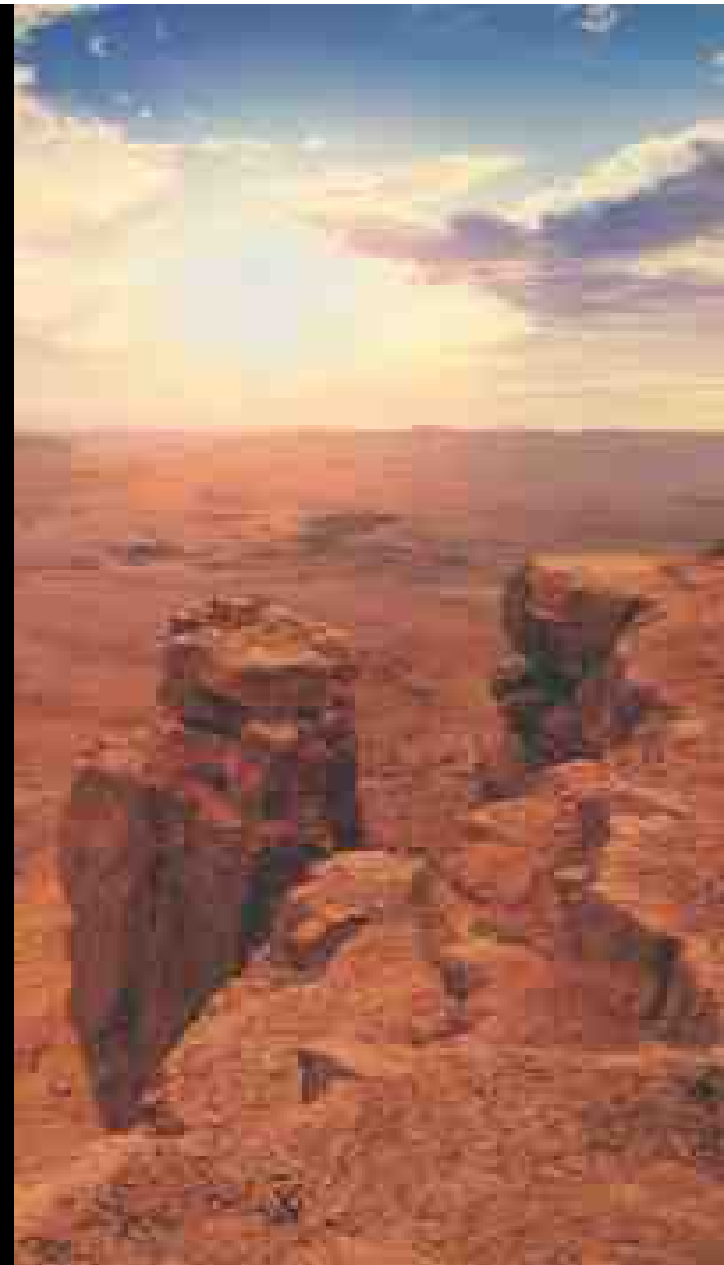
わたしは彼をその求める救いに入れよう。」



12:6 【主】のことばは混じり気のないことば。
土の炉で七度試され純化された銀。

12:7 【主】よあなたは彼らを守られます。
今の代からとこしえまでも
彼らを保たれます。

12:8 人の子の間で卑しいことが
あがめられているときには
悪しき者がいたるところで横行します。





IV. まとめと適用

ダビデに学ぶ刈り取りの重さ

エルサレム近郊の夕景

【ダビデの心の反映として、今日の箇所を振り返る】

■ 13～14章を読んで、ひたすら心がもやもやした。

それは、ダビデ自身の心がもやもやしているからだと気づかされた。

■ ダビデの言行に、かつてのようなキレがない。

神の勇士ダビデの即断即行の判断力、決断力は失われている。

■ もやがかかったように、靈的視界が不明瞭になる。

それが、罪の一つの結果だと教えられる。

→ 日々のことに、的確な判断が下せているか？ 一つの靈的指標。

【ダビデから、罪が信仰者の心に招く影響を考える】

- 罪がもたらす重大な影響の一つは、**靈的感性の著しい低下**。
- もし、主に忠実に仕えていた時のダビデであったなら？
そもそも、アムノンのところに、タマルを行かせなかったかも。
- 個々の責任は免れない。やはり悲劇が防げなかったとしても、
本来のダビデなら、まずアムノンに、的確な罰をくだしただろう。
アブサロムには、厳格な処分を行っただろう。
- 主に赦しが促されたときには、すべてを委ね、赦しただろう

【ダビデに学ぶ、罪の刈り取りの重さ】

- 家族内の一連の問題の根は、ダビデが犯した罪の刈り取り。
バト・シェバとの姦淫、ウリヤの殺人。
主に忠実な僕の家庭を破壊した、ダビデの家庭が崩壊していった。
- 罪の最も重大な問題は、他者への正しい処罰が下せなくなること。
アムノン、ヨアブ、アブサロムに、振り回されてばかりのダビデ。
- どんな人の集まりにも、過ちも罪もある。的確に対応するには、
何より自分自身を罪から遠ざけていなければならない。

【信仰者のこうむる不条理を考える】

- 主に忠実な信仰者でありながら、妻を奪われ、殺されたウリヤ。
律法とイスラエルの誇りに訴え、それでも、兄に犯されたタマル。
- あまりに不条理な二人の結末。しかし、それが、この世界の現実。
人は、どうしようもない罪人で、世界は恐ろしく深い闇の中にある。
- だから、罪なき主イエスが、犠牲にならねばならなかった。
- なぜ、という問いへの答えは、主イエスの十字架にしかない。

- 「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、
- ①わたしの罪(つみ)を贖(あがなう)うために十字架で死に、
 - ②墓(はか)に葬(ほうむ)られ、
 - ③三日目に復活(ふっかつ)したことを信じます。

この福音(ふくいん)だけが、わたしの救(すく)い、わたしの光です。わたしの罪も、人々の闇(やみ)も、あなたが、あらわにされます。どうか、御霊(みたま)の光をもって、わたしの心のすみずみまでも照(て)らし出してください。

わたしのすべてを、あなたの御手(みて)にゆだねます。主の心にある平安(へいあん)で わたしを満(み)たしてください。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」

【今一度、十字架の恵みを味わい知ろう】

■ 私には、自分では、どうしようもない罪がある。

認めた人は幸いだ。絶望の中で導かれる、たった一つの道がある。

「主イエス・キリストは、私の罪のために十字架にかけられた」
それだけが、私の救い、絶望の闇に差し込む一筋の光。

■ そして主イエスは、「死んで葬られ、死を打ち破って復活された」

主が、信じた者に、罪からの完全な解放をもたらしてくださる。

罪なき世界に罪なき者として、私を永遠に住まわせられる時は来る。

十字架と復活の福音を信じ、福音に生きよう。生き続けよう。